

エディトリアル

自治医科大学 副学長/皮膚科学 教授 大槻マミ太郎

へき地の皮膚科特集号という嬉しいご依頼をお受けするにあたり、編集企画は皮膚科学講座教授で診療科長も務めている小宮根真弓先生に一任し、私はエディトリアルのみ担当することになった。本誌への関わりは、副学長(兼地域医療振興協会理事; 2019年就任)の立場でインタビューを掲載していただいた2021年4月号以来となるが、皮膚科特集は私が講座を担当した20年間で初めてである。

これまで、「へき地の・・・」というタイトルで講義をしたことはないが、1998年に本学に助教授として赴任後、ポリクリやセミナーで力説していたのは水疱症診療である。赴任してまず驚いたのは自己免疫性水疱症、特に高齢者の類天疱瘡に頻繁に遭遇することで、当時は入院も多かった。教授就任と相前後して、病原性を有する自己抗体である抗デスマグレイン抗体(2003年)および抗BP180抗体(2007年)の血清検査が保険収載されたことから、へき地でも稀ではない高齢者の水疱症をみたら、直ちに2つの血液検査を同時に行うこと、そして一般に重症で専門医紹介が望ましい天疱瘡が除外できて、抗BP180抗体のみ陽性で比較的限局性の類天疱瘡であることが分かったら、専門医紹介による皮膚生検や蛍光抗体法等の検査はパスし、自身が類天疱瘡の主治医となってステロイド内服も開始する気概をもつこと、これらを学生に訴えていた頃が懐かしく想起される。

セミナーではプライマリ皮膚科というのをやっており、皮膚科の醍醐味はまず「見て分かる」(臨床診断)、そして「すぐ取って調べられる」(病理診断)、この両者を常に対比、フィードバックさせながら自身で臨床能力を生涯向上していける点である、と教えてきた。専門医でなくても、一瞥で診断できるものが少数でもあればすぐに役立つし、また調べる方も皮膚生検以外の最小限の検査さえ押さえおけば、プライマリでの仕事は立派にこなすことができる。地域での皮膚科のニーズに関する学生の意識は常に高く、選択必修BSLが無制限にとれた時代は、なんと1年で30人の学生が皮膚科の追加実習を志望したこともあるほどだった。

へき地皮膚科プロジェクトという観点では、ダーモスコピーを用いたほくろ検診を考えたこともあった。へき地に赴任する卒業生にカメラ付きダーモスコップを送り、足底のメラノーマや顔の基底細胞癌を1つでも発見できないか、という狙いだったが、立ち消えとなってしまったのは残念でならない。

さて本号の内容であるが、責任編集の小宮根先生に総論と各論割り振りをお願いした。各論では先に触れた水疱性疾患を含め、湿疹・皮膚炎から良性・悪性腫瘍に至るま

で、症例のカラー写真を豊富に提示するとともに、初診時の鑑別診断のポイント、専門医依頼のタイミング、自施設で経過観察する際の注意点、専門医から逆紹介時のフォローアップ、患者セルフケアの指導、介護施設や学校における注意点、診療所に置く有用な機器や薬剤、そして最近のトピックスやエビデンス等も盛り込んでいただいている。

何はともあれ、本企画が10年前であったなら当科に卒業生は一人も存在しなかったわけであり、企画依頼されてもモチベーションは上がらなかったに違いない。しかし、教授就任以来念願だった卒業生入局が2016年(実に36年ぶり)に叶った今は、へき地を含む地域での総合医を経験した卒業生パワーに溢れている。本特集号には、現在准教授の神谷浩二先生を筆頭に、卒業生皮膚科医の執筆者は4人を数え(全員学位も取得ないし取得見込み)、私が学会時に声かけして集っていた彼らとこのような興味深い企画を共有できることは、この上ない喜びである。快くご執筆いただいた当講座スタッフにもあらためて感謝の意を表するとともに、本号が地域医療全体のレベルアップにつながることを願ってやまない。